様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００８８９

研究課題名（和文）ドイツ語学習者の発話の非流暢性を発話の協働構築の観点から再検討する

研究課題名（英文）Rethinking disfluencies in German learners' utterances from the perspective of the collaborative utterance construction.

研究代表者
星井　牧子（Hoshii, Makiko）

早稲田大学・法学学術院・教授

研究者番号：９０３３９６５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　学習者の発話における「非流暢性」は「評価基準」と「学習目標」の二つの観点から考察することができる。日本語を母語とするドイツ語学習者の、インタビュー場面における発話の分析から、「自己訂正」は動詞に関係する箇所で多く出現していることが明らかになった。インタラクション場面からは、非流暢性を示す現象が、発話において学習者が直面している何らかの「難しさ」と学習者の持つ言語知識、自らの発話に対するモニタリングと仮説検証を示唆し、同時にそれがやりとりの相手による発話構築へのサポートや訂正的フィードバックを導き出し、発話の協働構築と「気づき」による学びにつながることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究により、「非流暢」な発話は学習者が直面している「難しさ」と学習者の持つ「言語知識」を理解する手がかりとなることが明らかになった。非流暢性の機能と役割を考察することによって、言語学習を言語使用場面における「プロセス」として捉えることが可能となり、ドイツ語学習・教育の実践現場に対しても、教材・言語学習場面・学習目標を考える上で必要な１つの指標を示すことができる。また、非流暢性の機能と役割を考察することによって、学習者の「できないこと・足りないこと」への着目から「できること・すでに持っている知識」へと、視点を転換し、教材・言語学習場面・学習目標を考える上での１つの指標を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：Disfluency' in learners' utterances can be considered from two aspects: ' assessment criteria' and 'learning goals'. In this project, the analysis of Japanese German learners' utterances in interview situations shows that 'self-correction' often emerges with verbs. The analysis of utterances in interactional situations suggests that disfluency phenomena occur when learners face some 'difficulty' in producing utterances, suggesting monitoring and hypothesis testing of their own utterances, and that at the same time they can elicit support for utterance construction and corrective feedback from the other, leading to collaborative utterance construction and language learning through 'noticing'. The analysis of this study shows that disfluencies in learners' utterances provide a clue to understanding the 'difficulties' learners face and the ' language knowledge' they possess.

研究分野：外国語教育

キーワード：外国語教育　ドイツ語教育　第二言語習得　学習者言語　インタラクション　非流暢性　文法習得

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 外国語学習者は様々な手段を用いてコミュニケーションに参加する能力を身につけることが不可欠である。たとえばヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）では、「話す」ことには、自らの考えを目標言語で発表するだけでなく、他者と「やりとり」する力が必要とされ、「やりとり」における言語使用の質的側面として、繰り返しや言い換え、訂正の使用、理解の表示、理解の確認などが挙げられている。しかし、外国語教材にみられる会話文のほとんどは、特定の文構造や語彙を導入するために「作られた」もので、言いよどみや言い間違いとその訂正、発話の重複、聞き返しなど、自然な発話場面で会話コミュニケーションを成立させるために必要な言語現象はほとんど見られず、実際の言語使用場面の話しことば特有の言語現象とは乖離がある。

(2) 外国語学習者の発話に見られる繰り返しや言い換え、訂正、フィラーを含むポーズなどは、「非流暢性」を示す指標とされ、第二言語での発話産出時の認知処理プロセスとの関係から論じられている。また外国語教育研究では、非流暢性を示す現象は訂正フィードバックの使用や理解の確認、意味交渉との関連で研究され、学習者自身による訂正は、コミュニケーション・ストラテジーの領域で扱われている。学習者自身による訂正を聞き手との発話の協働構築プロセスとして考察する研究も散見されるが、非流暢性を示す現象がインタラクションの中で持つ機能と外国語学習との関係を問う研究は多くない。

(3) 話しことば研究においては、統語現象をはじめ、書きことばとは異なる規範が明らかにされ、ドイツ語教育への応用も論じられているが、コミュニケーション重視の教材でも「作られた」会話がほとんどである。流暢性を高めるための練習はあっても、非流暢性を示す現象がインタラクションの中で持つ役割や機能は取りあげられていない。ドイツ語学習者の発話における自己訂正を、目標言語の文法知識の意識的な使用やモニタリングと自動化の観点から論じた研究はあるが、他者との発話の協働構築の視点からアプローチする研究は少ない（Hoshii & Schumacher 2017）。

２．研究の目的

こうした状況を出発点として、本研究では、従来、流暢性を下げる要素として扱われてきた、学習者の発話にみられる言い直しや言いよどみなどの現象を、外国語使用と外国語学習という枠組みで包括的に捉え直し、学習者が自らの言語知識を意識的・積極的に使用し、他者とのインタラクションの中で外国語での発話を構築するプロセスとして、他者とのやりとりの中での「発話の協働構築」という観点から再考することを目指した。さらに、他者とのやりとりの中での学習者による言い直しや言いよどみが、外国語学習において担う機能を考察し、インタラクション能力の指標として、ドイツ語習得研究およびドイツ語教育現場の双方に還元することを本研究の目的とした。

３．研究の方法

調査対象は日本語を母語とするドイツ語学習者（大学生）とし、インタビュー場面の発話と、ドイツ語母語話者を含む多人数コミュニケーション場面の発話を録音・録画した上で文字化した資料を用い、言い直しや言いよどみなどの「非流暢性」を示すとされる現象の含まれる発話シークエンスを抽出し、分析した。

(1) インタビュー場面の学習者の発話については、学習者の自己開始・自己訂正シークエンスにおける発話プロセスに焦点を当てて考察した。発話における非流暢性のうち、ポーズと繰り返し、自己訂正の出現箇所を統語構造との関係から分析した。

(2) 多人数コミュニケーション場面における学習者の発話については、非流暢性を示す現象がどのように他者との発話の協働構築につながり、どのような学びの契機となっているかを、質的研究手法を用いて考察した。

(3) インタビュー場面の分析には、平成 26 年度～29 年度科研費（基盤 C）採択課題で収集、文字化したデータのうち、日本語を母語とする大学生２名のインタビューを用いた。

(4) 多人数コミュニケーション場面の分析には、テレビ会議システムを用いたドイツ語母語話者・ドイツ語学習者間の多人数インタラクション場面を録画し、文字化作業をすすめ、分析の一次資料とした。

４．研究成果

(1) 外国語学習の目標と「非流暢性」

外国語学習と非流暢性に関する先行研究では、母語話者の自然な発話にも見られる非流暢性は、学習目標としてはほとんど考慮されていないことが指摘されている。非流暢性に対する捉え方に関する議論を踏まえ、流暢性を「評価基準」と「学習目標」の二つの側面から考察し、図１のようにまとめた。

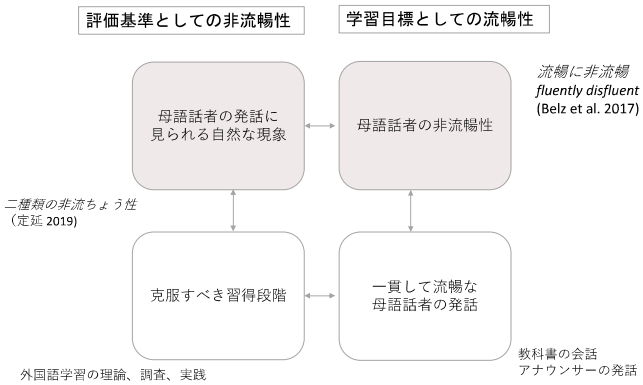

図１　非流暢性と第二言語の学習（Hoshii & Schumacher 2021:526 を元に作成）

(2) インタビューにおける学習者の発話と「非流暢性」

インタビュー場面の発話の分析では、非流暢性を示す現象のうち自己訂正は、表１に示すように、特に動詞に関連する箇所で多いことが明らかになった。

学習者	インタビュー	前置詞	動詞	名詞	冠詞	統語	その他	合計
Hiro	INT 01 KM 0	5	17	7	4	4	2	39
		13%	44%	18%	10%	10%	5%	100%
	INT 04 KM 6	16	29	11	8	22	6	92
		17%	32%	12%	9%	24%	7%	100%
	INT 07 KM 12	1	14	8	17	10	6	56
		2%	25%	14%	30%	18%	11%	100%
Tomu	INT 01 KM 0	5	14	14	3	6	3	45
		11%	31%	31%	7%	13%	7%	100%
	INT 04 KM 6	5	15	1	7	6	2	36
		14%	42%	3%	19%	17%	6%	100%
	INT 07 KM 12	3	15	9	5	12	5	48
		6%	31%	19%	10%	25%	8%	100%

表１：学習者の発話と自己訂正　(Hoshii & Schumacher 2022:536, Tabelle 2 を元に作成)

(3) 他者とのやりとりにおける学習者の発話と「非流暢性」

インタラクションデータについては、質的手法を用いて具体的シークエンス例における「非流暢性」の出現とその後のやりとりを分析した。言いよどみや繰り返しなどの非流暢性を示す現象は、発話において学習者が何らかの「難しさ」に直面している際に生じ、自らの発話に対するモニタリングと仮説検証を示唆すること、同時にそれがやりとりの相手による発話構築へのサポートや訂正的フィードバックを導き出し、発話の協働構築と「気づき」による学びにつながることを明らかにした。

(4) 今後の課題・展望

本研究の分析により、発話における非流暢性は、学習者が直面している「難しさ」と学習者の持つ「言語知識」を理解する手がかりとなることが明らかになった。非流暢性の機能と役割を考察することによって、言語学習を言語使用場面における「プロセス」として捉えることが可能となり、ドイツ語学習・教育の実践現場に対しても、教材・言語学習場面・学習目標を考える上で

必要な１つの指標を示すことができた。それは同時に学習者の「できないこと・足りないこと」への着目から、「できること・すでに持っている知識」へと視点を転換することにもつながると考える。

本研究の成果をもとに、学習者の発話における「非流暢性」の考察を続けることで、「定動詞第２位(XVS）)と「副文における定型後置（V-END)」の習得順序について、「処理可能性理論」（Pienemann 1998）と「Profilanalyse」(Grießhaber 2012）で提示されている習得順序、さらには現行のドイツ語教材における語順の導入順序に関する議論に対し、補足的な知見を提示することができると考える。また、非流暢性を手がかりに、学習者の発話と第１言語との関係および「自動化（Automatisierung)」の観点からも、今後、さらなる考察を加えることができるものと考えている。

＜引用文献＞

Belz, Malte. Sauer, Simon, Lüdeling, Anke & Mooshammer, Christine (2017). Fluently disfluent? Pauses and repairs of advanced learners and native speakers of German. *International Journal of Learner Corpus Research* 3 (2), 118-148.

Grießhaber, Wilhelm (2012). Die Profilanalyse. In: Ahrenholz, Bernt (Hrsg.): *Einblicke in die Zweitspracherwerbsforschung und ihre methodischen Verfahren.* Berlin: de Gruyter, 173-193.

Hoshii, Makiko & Schumacher, Nicole (2017). Verständnissicherung und gemeinsamer Äußerungsaufbau in der Interaktion per Videokonferenz. In: Schwab, Götz, Hoffmann, Sabine & Schön, Almut (Hrsg.): *Interaktion im Fremdsprachenunterricht. Beiträge aus der empirischen Forschung.* Münster: LIT, 79-92.

Hoshii, Makiko & Schumacher, Nicole (2021). Interaktionale Kompetenz als Lernziel für Lernende und Lehrende. Einblicke in kollaboratives Lernen per Videokonferenz. *Zeitschrift für Interaktionsforschung in DaFZ (ZIAF)* 1, 13-34.

Hoshii, Makiko & Schumacher, Nicole (2022). Rethinking Disfluencies in der Lernersprache - Selbstkorrekturen und Verzögerungen in der monologischen Produktion und in der Interaktion. In: Auteri, Laura, Barrale, Natascia, Di Bella, Arianne & Hoffmann, Sabine (Hrsg.) *Wege der Germanistik in transkultureller Perspektive. Akten des XIV. Kongresses der Internationalen Vereinigung für Germanistik (IVG)*, 527-543.

Pienemann, Manfred (1998). *Language processing and second language development: Processability theory.* Amsterdam: John Benjamins.

定延利之 (2019).『文節の文法』 大修館書店.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Hoshii Makiko & Nicole Schumacher	４．巻 3
２．論文標題 Rethinking Disfluencies in der Lernersprache - Selbstkorrekturen und Verzoegerungen in der monologischen Produktion und in der Interaktion	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Wege der Germanistik in trarnskultureller Perspektive. Akten des XIV. Kongresses der Internationalen Vereinigung fuer Germanistik (IVG)	６．最初と最後の頁 527-543
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3726/b19956	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Hoshi, Makikoi & Schumacher, Nicole	４．巻 -
２．論文標題 Verbzweitstrukturen und Vorfeldbesetzungen in der lernersprachlichen Entwicklung. Eine Projektvorstellung.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz. Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo.	６．最初と最後の頁 928-936
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Hoshii Makiko & Nicole Schumacher	４．巻 1
２．論文標題 Internationale Kompetenz als Lernziel fuer Lernende und Lehrende des Deutschen als Fremdsprache. Einblicke in kollaboratives Lernen per Videokonferenz.	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Zeitschrift fuer Interaktionsforschung in DaFZ (ZIAF)	６．最初と最後の頁 13-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.17192/ziaf.2021.1.8416	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　3件／うち国際学会　7件）

１．発表者名 Makiko Hoshii
２．発表標題 Interaktion und Kommunikation in Videokonferenzen im DaF-Unterricht.
３．学会等名 International Conference "Internationalization of teacher education for German as Foreign/Segond Language"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Hoshii, Makiko & Nicole, Schumacher
２．発表標題 Zur Rolle von Disfluencies in der Lernersprache - Implikationen von Selbstkorrekturen und Verzoegerungen fuer das Lernen und Lehren
３．学会等名 FaDaF2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Hoshii, Makiko & Nicole, Schumacher
２．発表標題 Rethinking "Disfluencies" in der Lernersprache. Selbstkorrekturen und Verzoegerungen in der monologischen Produktion und in der Interaktion
３．学会等名 XIV. Kongress der Internationalen Vereinigung fuer Germanistik（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 星井牧子
２．発表標題 留学期間における学習者のドイツ語習得を定動詞の位置から考える - 縦断的調査の結果から
３．学会等名 日本独文学会春季研究発表会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Makiko Hoshii & Nicole Schumacher
２．発表標題 Die Rolle der Vorfeldelemente bei der Realisierung von Verbzweig-Strukturen im Deutschen als Fremdsprache. Aufmerksamkeit in der Lernersprache
３．学会等名 Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 星井牧子
２．発表標題 ドイツ語学習者の発話における「非流暢性」を考える
３．学会等名 日本独文学会秋季研究発表会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Makiko Hoshii & Nicole Schumacher
２．発表標題 Zur Rolle von Disfluencies in der lernersprachlichen Produktion japanischer Deutschlernender
３．学会等名 GAL Jahrestagung（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Makiko Hoshii
２．発表標題 Videokonferenzen im DaF-Unterricht. Foerderung interaktionaler Kompetenz und interlingualer Kommunikation
３．学会等名 Internationales Symposium zur DaF-Didaktik（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Makiko Hoshii
２．発表標題 Kommunikation und Interaktion im virtuellen Raum im DaF-Unterricht. Erfahrungen und Analyseergebnisse aus bisherigen Projekten
３．学会等名 IDS-Schmankerl（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Empirische Fremdsprachenforschung: Herausforderungen und Missverstaendnissen von Lernerdaten im DaF-Unterricht	2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	ベルリン・フンボルト大学			